さり乍ら繼信忠信の母にてましまさば判官殿の御内の人の名字をば御存ひべし。そなたより名をさして承ひべし　「仰の如く我子ゆ御内にありし者なれば大方ゆ推量申す共さのみゆよも違ひひゆじ　「斯様に物申す山伏をばどこ山伏と御らんじてひぞ

「先唯今物仰られつる客僧ゆ此御供の中にてゆ一の老體にて御入ひないで此御供の中に年寄りたる人ゆたそや今思ひ出だしたり。判官殿の御乳母増尾の十郎權の頭兼房山伏にてましますな又あれなる山伏ゆどこ山伏にて御渡りひぞ　「是ゆ出羽の羽黒山より出でたる客僧にてひ　「いや是ゆ播磨の人の聲にてひ。夫をいかにと申すに此姥ゆもと播磨の者十三の年繼母を怨み都に上り故庄司殿と契り繼信忠信をまうけ今かく憂き目を見ひへば唯怨めしうこそひへされば我國の人の聲なればなどかゆ知らでひべきいで此御供の中に播磨の人ゆたそ是も思ひ出だしてひ判官殿鵜越とやらんを通り給ひし時狩人の姿にて參りあひ其儘名字賜り今迄も御供と聞えし鷲の尾の十郎山伏にて御渡ひな　「扨かう申す山伏をばどこ山伏と知ろし召されてひぞ　「此御聲こそ

大事にてゆへ都の人の聲かと思へば又近江の人の聲にも似たり。物仰られゆも何とやらん物々しく見え給ひてゆあつぱれ是ゆ西塔山伏ごさめれ夫ならば本ゆ近江の人三塔一の勇僧今ゆ又我君の一人當千の武士よのう　同上　武士も物の哀ゆ知る物をなどされば餘りに御心强くましますぞあかさぜ給へ人々と餘所目も知らず泣き居たり人目も知らず泣き居たり　子　「斯く心もなき人々に。さのみ言葉を盡くし給ゆんより今ゆ早御内へ御入ゆへ　判官　「暫ゆ。眞繼信の御子ならば判官殿と覺しきをさし給ひゆへ　子　上　「承りて

ひとて十二人の山伏のみな御顏を見渡して是こそそにておゆしませ　判官　「扨そにてあるべきとゆ何故に仰ゆぞ　子　「いやいかに包ませ給ふ共人に變れる御粧ひ疑ひもなき我君よ　上音同　父たべのうとて走りよれば岩木をむすばぬ義經なれば泣く〳〵膝に懷きとるげにや栴檀ゆ二葉よりこそ匂ふなれ眞に繼信が子なりけりと。餘所の見る目迄皆涙をぞ流しける　「今ゆ何をか隱し申すべき。我君にて御座ゆ此上ゆ御座を直されゆへ老尼も近う御參りあつて御目に懸り申されゆへ　「あら有難やゆ。我君を拜み參らする

に付て子供の事こそ思出でられてゆへ　ワキ「げに〳〵尤にてゆ

「いかに申上ゆ繼信が八島にての最期の有様剛なり共申し又不覺

なり共申す　判官「いづれか眞にてゆやらん承度くゆ　判官「いかに辨慶

ワキ「御前にゆ　判官「繼信が八島にての最期の様を委しく語つて老尼に

聞かせゆへ　ワキ「畏てゆ御諚と申し所望といひ懇に語つて聞かせ

（物語はいづれも獨つてよにもいろし）

物語　申ゆべし御前近う御參りゆへ　扨も八島の合戰今ゆかうよと

見えしに門脇殿の二男能登の守教經と名乘つて小船にとり乘り

磯間近く漕ぎ寄せいかに源氏の大將源九郎義經に矢一條參らせ

ん受けて見給へとのゝしるかう申す各々を始めとして皆御矢面

に立たんとせしが何とやらん心遲れたりし處に繼信ゆ心增りの

剛の人にてお馬の前にかけ塞がつて義經是にありやとてにつこ

と笑ひてひかへたり扨其時に教經ゆ彎き設けたる弓なれば矢坪

を指してひやうと放つ過たず繼信が着たりける鎧の胸板押しつ

け上卷かけずたまらずつつと射通し後に控へ給ふ我君の御着背

長の草摺にはつたと射留む扨其時に繼信ゆ馬の上にて乘直らん

乘直らんとせしか共大事の手なれば堪ずして馬より下にどうと

落つやがて我君お馬をよせ繼信を陣の後にかゝせいかに繼信い
かに〳〵と宣へ共たんだ弱りに弱つて終に空くなるなんぼう面
目もなき物語にてゆ　「扨其時に弟の忠信ゆゆざりけるか
「あら愚や忠信ゆ日の下に於て隱れましまさず能登殿の童菊王丸
繼信が首を目懸げ渚の方に走り渡るを忠信彎いて放つ矢に菊王
が眞中射通されかつぱと轉べば教經舟より飛んで下り菊王がわ
だ髮摑んで遙の船に投げ入れ給へば程なく舟にて空しくなる眼
前兄の敵をば弟の忠信こそ取つてゆへ　「扨ゆ敵も大將に事へ

申し御童　「繼信ゆ又我君の秘藏に覺せし御内の人　「彼ゆ平
家の舟の内　「此方ゆ源氏の陸の陣　「彼も主從　「是も主從
「思ひゆ同じ思ひなれば　「よその歎を思ひ合せて御慰みもゆへ
とよ　「夫ゆ仰迄もさむらゆず御身代に立ち參らする上ゆ今世
後世の面目なりさり乍ら一人なり共御供申し御笈をも肩に懸け
此御座敷にあるならば　十二人の山伏の十三人も連なりて唯
今見ると思ゆばいかがゆ嬉しかるべき　其時義經老尼に語り
給ふやう八島にて繼信今ゆかうよと見へし時思ふ事あらば委し

く言ひ置けとくれ〳〵尋ね問ひしに繼信其時に息の下より申すやう弓矢取る身の御身代に立つ事二世の願ひや三世の御恩を少し報謝する命の輕き身の露塵何か惜からんさり乍ら舊郷に八旬に及ぶ母と十に餘るわらんべ是等が事の不便さぞ少し心にかゝる雲の月に覆ひて光も闇くなる如く其儘くれ〳〵と終に空しくなりにけり　判官上「斯樣に郎黨を討たせつゝ自ら手を碎き忠勤まこと曇らずの遂に治まる世に出て繼信忠信が子孫を尋ね出だして命の恩を報ぜんと思ひし事も空しく我さへかゝる姿にて其名をだにも名乘り得ぬ憂き身の果ぞ悲しき　「母の思ひに堪へかねて更くるも知らず有明の月の盃取り出しお酌にこそ參りけれ

判官上「げにや心を汲て知人の情の盃を涙と共に受けて持　于上「鶴若酌に立代り別れし父の御前にて給仕すると思ひなして十二人の山伏の終夜の酌を取廻り座敷にも直らで進み勇める有樣を父に見せばやとぞ思ふさる程に夜もほのぐと明け行けば〳〵暇申てさらばとて早此宿を立出づる　于「いかに誰かある馬に鞍おき弓靫參せよ君の御供申さうずるに　「抑御供とは何事ぞ　于「君

の御供申てこそ親の敵にも逢ふべけれ　「夫の弓矢の御供也。是の修行の山伏道に何の敵のあるべきぞ」子カ「さあらば思出したり。小さき頭巾篠懸をとく拵へてたび給へ。山伏道の御供せん」「辨慶涙を押へつゝいかに申さん鶴若殿眞御供有たくの今日の道具を拵へ給へ明日の迎ひに参るべし」子上「眞ざうか」「中々に」ツレ「我も迎ひに参るべし」「我も迎ひに参らんと」同上「面々聲々にすかされて幼き身の悲しさの眞ぞと心得て少し言葉の弱りたる折を得て客僧の泣く〳〵宿を出でければ」シテ上静「老尼の鶴若を抱きい

れ　同上「行くの慰む方もありとまるや涙なるらん〳〵」

國栖

三月

前シテ老翁　後シテ藏王權現
ツレ女カ　ワキ天照武天皇
ワキ臣下　後ツレ天女

ワキ立衆ツーヨセイヨク「思ひずも雲居を出づる春の夜の月の都の名殘かな　「道道たらば位山上らざらめや只賴め　「神風や五十鈴の古き末を受くる。

（ヤナト人）御裳濯川の御流れやごとなき御方にておわしまず此君と申すに御讓として天津日嗣を受くべき所に御伯父何某の連に襲われ給ひ都の境も遠田舍の馴れぬ山野の草木の露分け行く道の果迄も御幸と思へば賴もしやゥ　身を秋山や世の中の宇陀の御狩場餘所に見てゥ

上歌　牡鹿伏すなる春日山〳〵水層ぞ增さる春雨の音

下歌

[illegible]いづくぞ吉野川よしや暫しこそ花曇りなれ春の夜の月の雲居に歸るべし賴みをかけよ玉の輿〳〵　ワキ詞「御急ぎは程にいづく共しらぬ山中に御着きにては先この所に御座をなされうずるにては　シテ「姥や見給へ　ツレ「何事にてはぞ　シテ「あの祖父が伏屋の上に紫雲のたなびいたるをおがまい給ふたか　ツレ「げに〳〵あたりに紫雲たなびきたゞならぬ空の氣色やな　シテ「おうたゞならぬ氣色はよ昔より天子の御座所にこそ紫雲は立つと申せ若も不思議に　ツレ同「尉が住家に　ワキ「左樣の貴人やおはすらんと　シテ「舟さしよせて我

家に歸り　ツレ「見ればふしぎやされればこそ　シテ「玉の冠直衣の袖　ツレ「露霜に萎れ給へ共　シテ上「さすがまぎれぬ御粧ひ　同上　さもやごとなき御方とは疑ひもなく白糸の釣竿をさし置きて抑やいかなる御事ぞ　シテ「斯程いやしき柴の戸の暫しが程のおましにもなりける事よいかにせんあら忝の御事や　シテ「是は抑何と申たる御事にてはぞ　ワキ「是はよしある御方にて御座はがまぢかき人に襲はれ給ひ是迄御忍びにてはは何事も尉を賴み思し召さるゝとの御事にては　シテ「扨は由ある御方にて御座はか幸ひ是は此尉が庵にては

程に御心安く御休みあらうずるにてゆ　「いかに尉面目もなき申事にてゆへ共此君二三日が程供御を近付け給ゆずゆ何にても供御に供へゆへ　「其由姥に申さうずるにてゆいかに姥聞てあるか此二三日が程供御を近づけ給ゆずとの御事なり何にても供御に奉り給へ　「折ふし是に摘みたる根芹のゆ　「夫こそ日本一の事我等も是に國栖魚のゆ是を供御に備申さうずるにてゆ

上カ心

「姥ゆ餘りの忝なさに胸うち騒ぎ摘み置ける根芹洗ひて老が身も心若菜を揃へつゝ供御に備へ奉るそれよりしてぞ三吉野の菜摘の川と申す也　「祖父も色濃き紅葉を林間に焚き國栖川にて釣りたる鮎を燒き同じく供御に供へけり　同上元亨釣書　吉野の國栖と云ふ事も此時よりの事とかや蓴菜の羹鱸魚とても是にゆいかで勝るべき間近く參れ老人よ　「いかに尉供御の御殘りを尉に賜ゆれとの御事にてゆ　「あら有難やゆさらばうち返して賜ゆらうずるにてゆ　「抑うち返して賜ゆらうずると申すこそ國栖魚のしにてあるぞ　「うち返して賜ゆらうずると申すこそ國栖魚のしるしにてゆへいかに姥供御の殘を尉に賜ゆれとの御事にてゆが

此魚ゐ未だ生き〳〵と見えてゆ　「げに此魚ゐ未だ生き〳〵と見えてゆ　「いざ此吉野川に放いて見う　「條なき事な宣ひそ。放いたればとて生き返るべきかゐ　「いや〳〵昔もさる例あり。神功皇后新羅をしたがへ給ひし占方に玉島川の鮎を釣らせ給ふ。

（仕舞其如く　ヨリ　鮎の段　と同上）

其如く此君も二度都に還幸ならば此魚もなどか生きざらんと岩きる水に放せば〳〵さしも早瀬の瀧川にあれ三吉野や吉瑞を現ゐす魚のおのづから生き返る此占方頼もしく思召されよ。

「いかに尉追手が掛りてゆ　「此方へ御任せゆへ　「いかに姥あ

（界で）の舟かいて來う　「心得申ゆ　「何清見秡清見秡ならば此川下へ行け〳〵　「扨ゐ清見原とゐ人の名よな。あら聞き馴れずの人の名や其上此山ゐ兜卒の内院にもたとへ又五台山清涼山とて唐土迄も遠く續ける吉野山隠れが多き所なるを何所迄尋ね給ふべき速かに歸給へ〳〵　「何と舟が怪しいとや是ゐほす舟ぞとよ〳〵　「何と舟を捜さうとや獵師の身にてゐ舟を捜されたるも家を捜されたるも同じ事ぞかし身こそ賤しく思ふ共此所にてゐ翁もにつくき者ぞかし孫もあり曾孫もあり山々谷々の者共出で合ひて。あの狼

（乾）

藉人を打ち留めゆへ〳〵（ツレ上カ）、（ヨワク）「のう聞し召せ追手の武士の歸り
たり　「今のかうよとおほぢ姥の　「嬉しや力を　「えいや
二人　同上　「えいと　舟引き起こし尊體の〳〵御恙なく川舟のかひある
御命助かり給ふぞ有難き　（クリ地）夫君の舟臣の水水よく舟を浮むと
（幾晴子）此忠勤のたとへなり　（ワキ）（サシ）※「有難やさしも姿の山賤の心の高き謀
げに貴賤にのよらざりけり　（ワキ下）「積善の餘慶限りなく流れ絶えせ
ぬ御裳濯川濁れる世にの住み難し　（千方上）「されば君としてこそ民を
はごくむ習ひなるに却つて助くる志　（同上）身の宿善のかひぞなき。

（鐘龍）〳〵一葉の舟の行末ばんりやうの雲居終になど至らざらめや
都路に立ち歸りつゝ秋津洲のよしや世の中治まらば命の恩を報
ぜんと綸言肝に銘じつゝ夫婦の老人の忝けなさに泣き居たり。
（クセ中）さる程に更け靜まりて物凄しいかにとしてか此程の御心慰さめ
申すべき然も所の月雪の三吉野なれや花鳥の色音によりて音樂
の呂律の調め琴の音に嶺の松風通ひ來る天つ少女の返す袖五節
の始め是なれや（中入　樂打上ル）（同上）少女子が〳〵其唐玉の琴の糸ひかれかな
づる音樂に神々も來臨し勝手八所此山に木守の御前藏王とも

後シテ（二一六）早笛仕舞「王を藏すや吉野山　同上地打上即ち姿を現はして即ち姿を現し給ひて天を指す手はや　「胎藏　地　「地を又指すはや　「金剛寶石の上に立つて一足を提げ東西南北十方世界の虛空に飛行して普天の下率土の内に王威をいかでか輕んぜんと大勢力の力を出だし國土を改め治むる御代の天武の聖代畏き惠新なりけるためしかな

前シテ菅丞相　ワキ法性坊　後シテ雷霆

ワキ「比叡山延暦寺の座主法性坊の律師僧正にてゆ扨も我天下の御祈禱のため百座の護摩を焚きゆが今日滿參にてゆ程に軈て仁王會を執り行はばやと存ゆ　ヨワク「げにや惠も新なる影も日吉の年古りて誓ひぞ深き湖のさゞ浪よする汀の月や　上歌　名にしおふ比叡の御嶽の秋なれや　月はや隅なき名所の都の富士と三上山法の燈火おのづから影明らけき惠こそ人を洩らさぬ誓ひなれ

（二一七）シテ「有難や此山はや往古より佛法最初の御寺なりげにや假初の値遇も

（鶴山護法一列し）

空しからず我立つ杣に冥加あらせてと望を適へ給へとてまんさんごおういちれつし中門の扉をたゝきけり　「深更に軒白し月ゆさぜ共柴の戸を敲くべき人も覺えぬにいかなる松の風やらん。

（下カ）あらふしぎの事やな　（ツヨク）　「聞けば内にも我聲を怪しめ人の咎むるぞと重ねて扉を敲きけり　（上カ）　「餘りの事のふしぎさに物の隙よりよく〳〵見れば是ゆ不思議や丞相にてましますぞや心騷ぎて覺つかな　「頃しも今ゆ明け易き月にひかれて此庵の扉を敲けば内よりも　「不思議や扨ゆ丞相か早此方へと　「夕月の

同上

（峰小諸影珍らしやより）影珍らしや客人の〳〵まれにあふ時ゆ中々夢の心ちしていひやる言の葉もなし上人も丞相も心解けて物語世に嬉しげに見え給ふ哀れ同じ世の逢瀬と是を思ゆめや〳〵　「扨御身ゆ筑紫にて果給ひたる由承ひ程に種々に弔ひ申てひが届きひやらん

「中々の事御弔ひ悉く届きて有がたうひ秋に遲るゝ老葉ゆ風なきに散易く愁を弔ふ涙ゆ問ゆざるに先落されば貴きゆ師弟の約

（ワキ下）「切なるゆ主從　（シテ中）　「睦しきゆ親子の契なりこれを三悌と云ふとか

（シテ中）や　「中にも眞實の志しの深きことゆ師弟三世に若くゆなし

同下 忝しや師の御影をばいかで踏むべきぅ　幼かりし其時の父もな
く母もなく行へも知ぬ身なりしを菅相公の養ひに親子の契いつ
の間に有明月のおぼろけに憐み育て給ふ事眞の親の如く也偖勸
學の室に入り僧正を頼み奉り風月の窓に月を招き螢を集め夏虫
の心の中も明かに　「筆の林も枝茂り言葉の泉盡きもせず文筆
の堪能上人も悅び覺召し荒き風にもあてじと御志の今迄も一
字千金也いかでか忘れ申すべき　「我此世にての望の適ひてゆ。
死しての後梵天帝釋の御憐みを被り鳴る雷となり内裏に飛入り。

(此一行中我に憂かりし雲客とあり客とあるは如新に誤ふ事となれり)大君の御爲惡き雲客を蹴殺すべし其時僧正を召れゆべしかまへて御參りゆな　「縱ひ宣旨の有といふ共一二度迄の參るまじ
「いや勅使度々重なる共かまへて參り給ふなよ　「王土に住める
此身なれば勅使三度に及ぶならばいかでか參内申さゞらん
吐きかけ給へば柘榴忽ち火焔となつて扉にばつとぞ燃上る僧正
向け置きたるを　おつ取つて噛み碎き　妻戸にくわつと
上カル　ツヨク　参ル論　「其時丞相姿俄に變り鬼の如し　同上　※「折ふし本尊の御前に柘榴を手
御覽じて騷ぐ氣色もましまさず洒水の印を結んで鑁字の明を唱

へ給へば火焔ゆ消ゆる煙の中に立隠れ丞相ゆ行へも知らず失給ふ行へも知らず失せ給ふ（宮中ワキ上）「偖も僧正ゆ紫宸殿に座し珠數さらくと押もんで普門品を唱へければ（同上）さしも黑雲吹き塞り闇の夜の如くなる内裏俄に晴れて明々とあり（ワキ）「さればこそ何程の事のあるべきぞと油斷しける所に（同上）不思議や虛空に黑雲覆ひ（早笛打上）電四方にひらめき渡つて内裏ゆ紅蓮の闇の如く山もくづれ内裏ゆ虛空に遡るかと震動ひまなく鳴神の雷の姿ゆ現れたり（ワキ）「其時僧正雷に向ひて申す樣卒土四海の中ゆ王土に非ずと云ふ事なし況んや菅丞相昨日迄ゆ君恩を被る臣下ぞかし内恩外忠の威儀未練なり靜まり給へあらけしからずやゆ（シテ上）「あら愚や僧正よ我を見放し給ふ上ゆ僧正なり共恐るまじ我に憂かりし雲客に（同上）思ひ知らせん人々よ〳〵とて小龍を引き連れて黑雲にうち乘りて内裏の四方に鳴り廻れば稻光電の雷光しきりにひらめき渡り玉體危く見えさせ給ふが不思議や僧正のおゆする所を雷恐れて鳴らざりけるこそ奇特なれ紫宸殿に僧正あれば弘徽殿に雷鳴する弘徽殿に移り給へば清涼殿に雷鳴る清涼殿に移

（脫稿後僧正なり共云々を謠わずして心によ雲客に謠ふと事となれり）

り給へば梨壺梅壺畫の間夜の御殿を行き違ひ廻りあひて我劣らじと祈るの僧正鳴るの雷もみあひ〳〵追つ懸け〳〵互の勢たとへん方なく恐ろしかりける有様哉千手陀羅尼をみて給へば雷鳴の壺にもこらへず荒海の障子を隔て是迄なれやゆるし給へ聞法秘密の法味に預り帝の天満大自在天神と贈官を菅丞相に下されければ嬉しや生きての恨み死しての悦び是迄なりや是迄とて黑雲にうち乘つて虚空に上らせ給ひけり

前シテ老翁　ワキ臣下
ツレ老女　後シテ天照大神

決第ツヨクキ「治めし儘に世を守る〳〵伊勢の宮居に參らん　ワキ詞「抑々是の大炊の帝に仕へ奉る臣下也扨も我君伊勢大神宮を信じ給ひ數の御寶を捧げ給ふ其勅を蒙り唯今伊勢參宮仕ひ　道行「風の上なる松本や〳〵雲雀落ち來る粟津野の草の茂みを分け越えて瀬田の長橋打ち渡り野路篠原の草枕夢も一夜の旅寢かな〳〵　詞　急ぎひ程に是のはや勢州齊宮に着てひ今夜の節分にて此所に繪馬を掛くると申ひ間今宵の此所に逗留し繪馬を掛くる者を見ばやと

存ひ（シテ）（ツレ二人）（異一聖）「新玉の春に心を若草の神も久しき惠みかな（二ノ句）霞も雲も立つ春を去年とや云ふん年の暮　「夫馬を華山の野に放ち牛を桃林に繋ぐ事皆聖人の諺哉。それは賢き世の習ひ時に引かれて四方の海の濱の眞砂を數へても君が千年のある數をたとへても猶有難やな　（下歌）千早振神代を聞けば久堅の　（上歌）天津日嗣の代々古りて〳〵人皇末代の子孫迄ありし惠を受け繼ぎて治まる御代の我等迄及ばぬ君を仰ぎつゝ夜晝仕へ奉る〳〵　「いかに是なる人々に尋ぬべき事のひ　「此方の事にてひか何事にてひぞ

（ワキ）「今夜は此所に繪馬を掛くると申ひは眞にてひか　（シテ）「さんぴ即ち我等が繪馬を掛けひよ　（ワキ）「夫は何の謂に依つて掛けられひぞ　（シテ）「是は唯一切衆生の愚癡無智なるを像り馬の毛により明年の日を相し又雨繁き年をも心得べき爲にてひ　（ワキ）（上）「扨々今夜はいかなる繪馬を掛け明年の日を相し給ふ　（ツレ）「誓ひはいづれも等しけれ共先雨露の惠を受け民の心も勇みあるよみぢの黑の繪馬を掛け國土豐になすべきなり　（シテ）「暫くひ耕作の道の直なるをこそ神慮も悅び給ふべけれ先此尉が繪馬を掛け民を悅ばせばやと思ひひ

「左様に謂を宣ふば此方も更に劣るまじ力をも入れずして天地を動かし目に見ぬ鬼神の猛き心を和ぐる歌ふ八雲をさきとして天ぎる雪のなべてふる是等ふいかで嫌ふべき」「かくしも互に爭ふば隙行く駒の道行かじいざや二つの繪馬を掛けて萬民樂む世となさん」「げにいふれたり此程ふ一つ掛けたる繪馬なれ共「今年始めて二つ掛けて雨をも降らし」「日をも待ちて」「人民快樂の御惠を」同上

＊かけまくも忝なや是をぞ頼む神垣に繪馬ふ掛たりや國土豐かになさうよ」同上

賀茂の御あれのひをりの日

〈是を物見に御隨身色めく紙の四手つけて掛け並べたる駒くらべかけてやさしく聞こえしふ松風の上の藤波尾上の花に咲き添へてたなびく白雲又掛けて色を増す也」僧正遍昭ふ歌の様ふ得たれ共誠少し例へば繪に畫ける遊女の姿にめでゝ徙に心を動すふ淺緑糸よりかけて繋ぐ駒ふ二道掛けて中々恨みしふ戀路の空情逢ふさへ夢の手枕」「忍ぶ今宵のあらふれて言葉をかすふ此上ふ何をか包むべき我等ふ伊勢の二柱夫婦と現じ立出づる信ずべし信ぜば疑ひ波の川竹の夜も明け行かば内外にて待ち

えてまみえ申さんと夜半にまぎれて失にけり〜（※地上ツヨク出端）「雲の萬里に收まりて月讀の明神の御影の尊容を照し出て給ふ　（後シテ）「我の日本秋津島の大棟梁地神五代の孫天照太神（同上）和光利物の御裳（打上）濯川の〜水を蹴立つる波の如しされ共誓の虚空に満ち來る五色の雲も輝き出づる日神の御姿有がたや（打上）「所の齋宮の名に古りし〜神墻しどろに木綿四手のあらぬに神體現れ給ふ有難や（舞打上）「昔天の岩戸に閉ぢ籠りて〜悪神を懲らしめ奉らんとて日月二つの御影を隠し常闇の世の扨いつ迄かあらぶる神々

是を歎きていかにも御心とるや榊葉の青和幣白和幣色々様々に歌ふ神樂の韓神催馬樂千早振（天女神樂）「面白や（地上）（打上）面て白やと覺えず岩戸を少し開いて感じ給へば、いつ迄岩戸を手力雄の尊の引き開け御衣の袂にすがり引き連れ現れ出て給ふ有様又珍しき神遊びの面白かりしを思し召し忘れず高天の原に神留まつて天地二度開け治まり國土も豊に月日の光の長閑き春こそ久しけれ

前シテ　里女
ワキ　日蓮上人
後シテ　龍女

ワキ　シテ　ツヨク「夫世尊の教法は五時八教に配立し權實二教に分かてりさる程に滅後の弘經も正像末に次第して今後五百歳の時なれば時機に叶ふ此妙經を弘めつゝ國土安全の勸めをなせし其甲斐の身延の山に引き籠り寂寞無人の扉の内には讀誦此經の聲絶えず一心三觀の窓の前には第一義天の月まとかなりヨワク尾上の風の音までも

〈皆法の聲ならずや落瀧津瀬の響きも唯懸河流瀉の御聲にて鷲の御山も餘所ならず八卷の法の花の紐時知る風に立ち渡る

上 身の浮き雲も晴れぬれば心の月ぞさやかなる〳〵 ワキ詞「我法華修行の身なれば讀誦禮讃を怠る事なき所に何所共なく女性の絶えず詣で候今日も亦來りて候はば名をたづねばやとおもひ候

シテ女 次第「法の激を身に受けて〳〵誠の道に入らうよ 有難の靈地やな漢土にては四明の洞和朝にては我立つ杣と詠じけん御山もいかでまさるべき扨又大白波木井の河風に波の立居もおのづから。

下歌 隨縁眞如を現せり。 谷の戸出づる鶯も法を唱ふる花のえだ。

上歌 常の小謠來ても見よより 來ても見よ身延の山の深雪だに〳〵春を迎へて消えぬれば是も惠日の光かと思へば我作りにし罪科も斯くこそ消えめ賴もしやと信心はいやましにげに有難き御山かな〳〵 ワキ「怪しやな此山の花より外は知る人もなき庵なるに抑や女性の御身ながら。御經讀誦の折々に歩みをはこび花水を佛に捧げ給ふ扨おことは如何なる人にてましますぞ シテ「是は此あたりに住む者なるがかく有難き御法に逢ふ事盲龜の浮木優曇花の花待ち得たる心ちして悦びの涙の露かゝる折しも緣を結び後の世の闇を晴さずは又いつの世を松の戸の明暮歩みを運びつゝ上人に結緣をなすばか

り也　「げに奇特なる信心哉此法華經を保ちぬれば若有聞法者無一不成佛と說き給ひて二乘闡提惡人女人おしなめて成佛する事疑ひなし　「扨も殊更有難や　（上歌同）　その名をだにも未だ聞かぬ。御法を既に保つ迄いかで契りを結びけんげに賴もしき折柄や猶も女の佛となる謂を示しおわしませ　「中々の事草木國土悉皆成佛の法華經なれば女人の助かりたる所をも語つて聞かせひべしッヨク「抑々法華經といつぱ釋尊久遠劫の其昔初成道の時悟り得給ひし妙法華經なり　※「然に華嚴の朝より般若の夕べに

至る迄抑止在懷し給ひて種々の方便機に隨ひ終に一乘を說き給ひぬ十界差別まち〳〵也　さる程に女人も外面も菩薩に似て內心も夜叉の如しと嫌はれし其言の葉も諸々の經の內にし陸奥の安達が原の黑塚や荒れたる宿のうれたきに假にも鬼のすたくなると詠しも女の事とかや斯かる憂き身の浮かまん事いつの時をか松山や袖に涙の浪越えて作り重ねし罪科を悔の八千度身をかこち佛の御法の言の葉さへ恨めしとのみ歎きけり　「然に此法華經も佛七十餘歲にて始めて說かせ給ひしにそよや一味の

法の雨等しく濺ぐ濕ひに敗種の二乘闡提も皆々同じ悟りを得殊に文珠の教にて龍女の須曳に法をえて此世乍らの身を捨てず元の悟りの古里に立歸る有様や錦の袂なるらん　地上「此妙典の理を」説く唐糸の一筋に仰ぎて保ち給へや　甲「有難の御事や扨のわらのも隔てなき御法の水を手に結び絶えず苦しき三熱の焔を早く免かれん　地上「抑三熱の苦しみを免かるべしと宣ふの扨の御身の霊神の假に女となりたるや　シテ上「今の何をか包むべき我の七面の池に住む月並の數知らぬ年經たる蛇身なり　地上「さらば懺悔の其

爲に元の姿を見せ給へ　シテ上「耻し乍ら報恩に有し姿を現さんと　甲上「夕風も烈しく立つや黑雲の行へも早き雨の足踏み轟かし鳴神の稲光して冷ましき音にまぎれて失にけり　中入待謠「かゝる不思議に逢ふ事も唯是法の力ぞと心をすましひたふるに讀誦をなして待ち居たり　同上「あら不思議やな今迄の妙に優なる女人と見えつるがさも冷ましき大蛇となつて日月の如くなる眼を開き上人の高座を幾重共なくくると引き纏ひ慙愧懺悔の姿を現し高座へ頭を差上て瞻仰してこそ居たりけれ

ワキ下　同ニ

「其時上人御經を取上げ〳〵於須曳頂便成正覺と高らかに唱へ給ば忽ち蛇身を變じつゝ忽ち蛇身變じつゝ如我等無異の身となれば空には紫雲たなびき四種の花ふり虛空に音樂聞こえきて宜彌が皷にたぐふなる報謝の舞の袂も異香薫じて吹き送る松の風颯々の鈴の音も更け行く夜半の月も霜も白和幣ふり上て聲すむや

シテ上　地上

「謹上　「再拜

神樂

「鷲の山いかにすみける月なれば

下地　中

「入りての後も世を照らすらん

樂ノル

「嬉しや妙經信受の功力〳〵。

上　同ニ

三身圓滿の妙躰を受けて和光同塵結緣の姿を現し垂跡示現して。

此山の鎭守となつて火難水難諸々の難を除き七福則生の願を滿てしめ世々を重ねて衆生を廣く濟度せんと約諾固く申つゝ行へも白雲に立ちまぎれて虛空に上らせ給ひけり

前シテ　白桃
前ツレ　王母
ワキ　里人
後シテ　早子幽霊
後ツレ　照君幽霊

ワキ詞

「是は唐土かうほの里に住居する者にてゆ扨も此所に白桃王母と申す夫婦のゆが一人の息女を持つ其名を昭君と名付く帝に召されて御寵愛限りなかりし處にさる仔細あつて胡國へ移されてゆ夫婦の人の歎き唯世の常ならず近所の事にてゆ程に立越え弔ゆばやと思ひゆ

ツレ二人　「散りかゝる花の木蔭に立寄れば空に知られぬ雪ぞ降る

「是は唐土かうほの里に住居する白桃王母と申す夫婦の者にてゆなり

「斯程に賤しき身なれ共美名をあらゆす息

女あり　二人　昭君と彼を名付けつゝ容顔人に勝れたりされば帝都に召されて後明妃と其名を改めて天子にまみえおゆします

シテ上「斯程いみじき身なれ共猶も前世の宿縁離れやらざる故やらん諸人の中に撰ばれて胡國の民に移され漢宮萬里の外にして見馴れぬかたの旅の空思ひやるこそ悲しけれ　シテ下「され共供奉の官人共旅行の道の慰めに絃管の數を奏しつゝ馬上に琵琶を彈く事も此時よりと聞くものを　下歌　地　畫圖にうつせる面影も今こそ思ひ知られたれ　上歌　※小謠　※彼照君の黛ゆゑ緣の色に匂ひしも春や繰るらん

糸柳の思ひ亂るゝ折毎に風諸共に立ち寄りて木蔭の塵を拂ゆん　シテ上　※「いざゝ庭を清めんと老夫ゆ箒をたづさへたり

ツレ上「げにや心も昔の春老の姿もさゝがにのいと苦しとゆ思へ共風結ぶ涙の袖の玉だすきかゝる思ひも子故なり　シテ「唯世の常の賤の男と人もや見るらん愧かしや　ツレ「日ゆ山の端に入相の　シテ「かねて知らする夕嵐　ツレ上「袖寒しとゆ思へども　シテ「子のためなれば　ツレ「寒からず　次第　二人上「落葉の積る木蔭にや嵐も塵となりぬらん　同下　落葉の積る木蔭にや落葉の積る木蔭にや嵐も塵と成ぬらん　上歌　げに

世の中に憂き事の　心にかゝる塵の身ゆ拂ひもあへぬ袖の露涙の數や積るらん風に散り水にゆ浮かむ落葉をも暫し袖に宿

甲　下歌

さん　涙の露の月の影　夫かと見ればさもあらで小笹の上の玉霰音もさだかに聞こえず　「餘りに苦しうゆ程に休まばやと思ひゆ　「いかに此家の内に白桃の渡りゆか　「誰にて御入ゆぞ　「いや某が參てゆ　「此方へ御出でゆへ　「いかに申ゆ扨も昭君の御事御心中察し申てゆ　「御とむらひ有難うゆ

ワキ

「又申すべき事のゆ此柳の木の本を立去らずして清め給ふゆ何と

申したる御事にてゆぞ　「昭君胡國へうつされし時此柳を植ゑ置き我胡國にて空しくならば此柳も枯れうずると申しつるが御覽ゆへ早片枝の枯れてゆ　「げにゞ御歎き尤にてゆ扨々昭君ゆ何しに胡國へゆ遷され給ひゆぞ　「扨も昭君胡國に遷されし其古へを尋ぬるに天下を治めし始なり　「然れば胡國の軍こはうして從ふ事期し難しされば互に和睦して其しるし一つなからんやとて美人を一人遣すべき御約束の有りしにゆ　抑漢王の宣旨にゆ三千人の寵愛いづれをわくる方もなし諸々の宮女の好色

高位の姿を賢聖の障子に似せ繪に是を現し中に劣れる樣あらば則ち彼を選みて胡王の爲に遣し天下の運を鎭めんと倫言ならせ給へば數々の宮女達是をいかにと悲しみ繪かける人を談らひ皆賂を贈りつゝ御約束のありし故　「さればうつせる其姿いづれを見るも妙にして柳髪風にたをやかに桃顏露を含んで色猶深き姿なり中にも昭君の並ぶ方なき美人にて帝の覺えたりしなり夫を賴める故やらん唯うち解けてありしに畫圖に寫せる面影の餘りいやしく見えしかばさこそ寵愛甚しゝと申せ共君子に私の言葉なしとや覺しけん力なくして昭君を胡國に送り遣はさる

「昔桃葉といひし人仙女と契り淺からざりしに仙女空しくなりて後桃の花を鏡に映せば即ち仙女の姿見えけるとなり此柳もさながら昭君の姿いざゝせ給へ鏡に映して影を見ん　「夫の仙女の姿なりいかで是にはたとふべき　「いや夫のみならず鏡には戀しき人の映るなり　「夢の姿を映しゝは　「とけつといひし旅人なり　「故郷を鏡に映しゝは　「花の鏡となる水は——散りかゝる花や曇

(シン トケツは人名なれども本字不明)

「夫は昔に年を經て

るらん思ひいとゞます鏡若しも姿を見るやと鏡に向つて泣き居たり（後昭君上）「是ぞ胡國に遷されし王昭君の幽靈也扨も父母別れを悲しみ春の柳の木のもとに泣き悲み給ふ痛ましさよ急ぎ鏡に影を映し父母に姿を見え申さん　春の夜の朧月夜にあらぬ（地上）「曇り乍らも影見えん（早笛）「恐ろしや鬼とや云ふん面影の身の毛もよだつばかりなりいかなる人にてましませば鏡にぞ映り給ふらん（後シテ上）「是ぞ胡國の夷の大將呼韓邪單于が幽靈なり（ツレ上）「胡國の夷ぞ人間なり今見る姿ぞ人ならず目にぞ見ね共音に聞く

冥途の鬼か恐ろしや（シテ下）「呼韓邪單于も空しくなる同じく昭君が父母に對面の爲に來りたり（ツレ）「由なかりける對面哉姿を見るも恐ろしや（シテ）「抑恐るべき謂ぞ如何に（シテ上）「心に知らぬ我姿鏡に寄（仕舞）て見給へとよ（シテ上）「いで〳〵鏡に影を映さん眞に氣疎き姿かと鏡に立寄りよく〳〵見れば恐れ給ふもあら道理や（同上）「荊棘を戴く髮筋ぞ〳〵（シテ上）「主を離て空に立ち（地上）「元結更にたまらねば（シテ下）「さね葛にてむすびさげ（同上）「耳にぞ鎖を下げたれば（シテ上）「鬼神と見給ふ　姿も恥かし鏡に寄りそひ立つても居ても鬼とぞ見れ共

人とも見えず其身かあらぬか我ならば恐ろしかりける顔つきか
な面目なしとて立ち歸る――同下キリ――唯昭君の黛も〳〵柳の色に異な
らず罪を現す淨玻璃も夫も隱れもよもあらじ花かと見えて曇
る日も上の空なる物思ひ影もほのかに三日月の曇らぬ人の心こ
そ誠を寫す鏡なれ〳〵

＊

番外
四番目
略脇能

次第ワキツヨク「山より山の奥までも〳〵道あるや時代なるらん　調　是も魏の
文帝に仕へ奉る臣下なり扨も我が君の宣旨にも酈縣山の麓より
藥の水涌き出でたり其水上を見て參れとの宣旨を被り唯今山路
に赴きひ急ぎひ程に是もはや酈縣山に着きてひ是に庵の見えて
ひまづ此あたりに徘徊し事の仔細を窺ばやと存ひ　ヨワク「夫邯鄲
の枕の夢樂しむ事百年慈童が枕も古への思ひ寢なれば目もあも
ず　同上　夢もなしいつ樂しみを松がねの〳〵嵐の床に假寢して

[illegible]

枕の夢の夜もすがら身をしる袖のほされず頼みにし甲斐こそなけれ獨りぬの枕詞ぞ恨みなる

「不思議やな此山中の虎狼野干の栖なるに是なる庵の内よりも現れ出る姿を見れば其様けしたる人間也いかなる者ぞ名を名乘れ　「人倫通わぬ所ならば其方をこそ化生の者とも申すべけれ是の周の穆王に召し仕われし慈童がなれる果ぞとよ　上「是の不思議のいひ事哉眞しからず周の代の既に數代の其かみにて王位も其數移りきぬ　「ふしぎや我も其儘にてきのふやけふと思ひしに次第に變るそのかみ

とも扨穆王の位もいかに　「今魏の文帝前後の間七百年に及びたり非想非々想も知らず人間において今迄生ける者あらじいかに様化生の者やらんと身の怪めをぞなしにける　「いや猶も其方をこそ化生の者とも申すべけれかたじけなくも帝の御枕に二句の事なりと各々立寄り讀て見れば　ヨワク「枕の要文疑ひなく　下「具の偈を書き添へ賜りたり立寄り枕を御覽ぜよ　「是の不思議一切功德慈眼視衆生福壽海無量是故應頂禮　同上　此妙文を菊の葉に置したゞりや露の身の不老不死の藥となつて七百歳を送りぬる。

汲む人も汲ざるも延ぶるや千歳なるらん面白の遊舞やな　樂　シテ上「有難の妙文やな　同上　即ち此文菊の葉に。悉くあらはるされば

にや雫も芳しくしたゞりも匂ひ淵ともなるや谷陰の水の所は酈縣の山の滴り菊水の流れ。いづみは本より酒なれば汲みて進め。掬ひて施し我身も飲むなり飲むなりや月の霄の間其身も醉に。引れてよろ〳〵よろ〳〵と唯よひよりて。枕を取上げ戴き奉りげにも有難き君の聖徳と岩根の菊を手折りふせ〳〵しきたへの袖枕花を蓆に臥したりけり　シテ下「本より藥の酒なれば　同下〳〵醉に

も侵されず其身も變らぬ。七百歳を保ちぬるも此御枕の故なれば。如何にも久しき千秋の帝萬歳の我が君と祈る慈童が七百歳を我が君に授け置き所は酈縣の山路の菊水。くめやむすべや呑むとも〳〵盡きせじや盡きせじと菊かき分けて山路の仙家に其儘慈童は入りにけり

番外
四番目
畧二番

楠露五月

シテ滿一　子方正行
ツレ正成　トモ從者

ツレ正成「是の楠正成なり。扨も朝敵尊氏大擧して上洛すべき由聞し召され。急ぎ正成に馳せ向ひ義貞に力を合せよとの宣旨にまかせ。唯今兵庫の津へ罷り下りゆ。又存ずる仔細のゆ間正行を舊郷へ返さばやと思ひゆ。いかに誰かある

トモ「御前にゆ

ツレ正成「滿一に正行をつれて此方へ來れと申ゆへ

トモ「畏つてゆ。いかに恩地殿に申ゆ

シテ滿一「何事にてゆぞ

トモ「若君の御供申し。急ぎ御本陣へ御參りあれとの御事にてゆ

シテ滿一「畏つてゆ。いかに申上ゆ。若君の御供申てゆ

ツレ正成「いかに

正行。唯今申す事をよく〳〵聞きゆへ。扨も此度の出陣正成討死すべき時こそ至りたれ夫に就て正行の満一を伴ひ千早に歸り命のあらん程の忠勤し上を敬ひ下を憐み某が志をつぎゆへ。又満一に。正行の成長の程を賴む也是を此世の別と思ひて。急ぎ舊郷へ歸りゆへ

正行「仰謹んで承りゆ。さり乍ら弓矢の家に生れ父の最期をよそに見て誰に面を向けゆべき。唯召具して。給ゆりゆへ

正成「こざかしき事を申す者哉是皆朝廷の御爲なれば。と〳〵千早に歸りゆへ

正成「いかに君の御爲なりとも。罷り歸る事ゆ。なり難うゆ

正成「やあか程迄父が申す事に從ゆざるやと恩愛の子を叱りければ

同上 正行も満一も〳〵なにと云ふべき言の葉も泣く〳〵袖をしぼりつゝ畏つたるけしきかな〳〵

正成「此上ゆ語つて聞せゆべし。扨も逆徒尊氏兄弟西海より大軍を率ゐ上洛すべき由叡聞に達し。急ぎ正成に馳せ向ひ義貞諸共追伐すべきとの勅諚也正成謹んで申し上るやうゆ此度逆徒罷り上る事新手といひ大軍といひ勞れたる官軍を以てくひとめゆん事中々存じも寄らず義貞を召返され。今一度叡山へ行幸なし奉りなば必定逆徒上洛仕ゆべし其時

正成の糧道を絶ち義貞と内外より攻めゆるんに於ては恐れ乍ら御勝利疑ひある可らずと必勝の計議を申上ぐるといへども坊門殿の支へにて既に防戰に定る事偏に天運の極まりなり　夫日月うへに明かなれ共雲霧光を覆ふ習ひ今に始めぬ事なれ共嘆きても又餘りあり　正成上「良藥口に苦く忠言耳に逆ふといふ　其故事を語給ひ藤房の卿の世を遁れ今正成が門出も引きの返さじ武夫の　正成下「彌猛の心ふし清く世をいさめんと思ふなり　獅子の子を生みて三日を經る時の數千丈の巖より是を投げて試る其子獅

子の氣力あれば教へざるに宙より跳ね返りて死せずといへり況んや正行十歳に餘りぬ一言耳に留めつゝ此教戒に違ゆざれ我討死と聞とても歎きを留めいづく迄も朝敵を平らげて聖運の開けん事を思ふべし　正上「たとひ逆賊日の本に羽をのし嘴を鳴すとも命のあらん其程の帝位を守護し私の心いさゝか無き跡に汚名を殘す事勿れおひさき思ふ撫子にかゝる涙や楠の露　正上「時しも頃の五月雨のふる枝も繁る下草の雫にしぼる袂かな　正上「花散りて春の暮にし櫻井の名にだにありて朽ちせざる　正上「石になるてふ

楠の葉の恨も何かあまざかる　正「鄙人迄も哀れしる　満「思愛

子方「親子　満正子三人「主從の別れも今更に涙を袖に満一がお酌に立て取敢

「　満上　地　満

ず　ツヨク「清き名を千代に傳へて菊水の　「流れ久しき湊川　男舞「諸

地上　打上

人の鑑となりてますらをの　ヨワク「花橘の香ひぬる哉香ひぬる哉

正下　同上

「斯て時刻も移るなる　とく〳〵歸れといさぎよき仰せに從ふ

主從つきぬ涙をひるがへし其名も清き河内の國へ歸るゆ孝行

とまるゆ忠義の畏きためしぞありがたき　終

ワキ詞「是ゆ五條わたりに住居する藤原の何某にてゆ扨も我未だ難波津

を見ずゆ程に此度一見せばやと思ひゆ　ヨワク「津の國の難波の春の

ゆかしさに今日思ひ立旅衣　同ワキ日影長閑き都の空霞隔たる山崎や。

本文にあるは此章及び節附に相違あり依て以下此の點を進んへ記す

（二六五）

關戸の宿も名のみにて戸さゝぬ御代ゆ行きかふ人の姿さへ實に

下　下歌

ゆたけしや　上歌　爰ゆ何所ぞふる年の木の葉も積る芥川暫しやす

暫しながらの旅心とあり

らふ昆陽の池　芦の若葉のなごゆしみ〳〵風も音せでよる

浪の響きゆさすが聞て戀ふ難波の浦のうらゝなる春の氣色を冷

ゾ見ん〳〵　「面白や難波の浦の春の影色里は花咲匂ひみち遠の山々打霞み青海原は白波のやへをる上にあま小舟行きかふ様は古への家持の卿の詠めまで思出られてひ櫻花今盛り也難波の海おしてる宮にきこしめすなへ今は花いまだふくみて梅の盛りにてひ　「のう〳〵今の歌をばなど眞の儘に吟じさせ給ひひぬぞ　「ふしぎやな彼歌は萬葉集に有りつるを唯其儘に口ずさみしに誤りありや覺束な　「尤も今の草子には さなんめれど。此歌は家持の郷いまだ兵部の輔なりし時公事にて此國にませし

（二月）程如月の十あまり三日讀給へり扨て彌生の三日にふゝめりし花の初めに來し我や散なむ後に都へ行かんと春の初め都を出でゝ今暫ますべきにかくよみ給ひしかば彼如月の中の三日は梅の花（梅）こそ盛りならめ其上おしてる宮にきこしめすなへとは大さゞきの天皇の御位に即かせ給ひし事なればかたぐいかで櫻の歌なるべき　「實に理りなり古き書には文字のたがひのやゝあれば。よく辨へて見るべかりけり扨々斯く迄わき給ふ御身は如何なる人やらん　「いや誰とても理のまに〳〵聞し召さんには其人の

名ハ不用ならん。先づ〳〵さきの御言葉の末に花いまだふゝみて梅の盛と宣ひき。梅の盛りハ花ならずや　「眞に是も誤り也。何の花をも夫のみにてハ花とのみよめど、こと花と並べていふに櫻をのみ花といふべきそのよしハいかで其跡ありそ海　「濱の眞砂ハよみぬとも歌の言葉の數々ハ　「人の心を種として讀出るなるものからに　「よもつきせじな去り乍ら　上歌同　うらやすの安き神代のつたへとて〳〵まうけて讀出る歌の道直ぐなればこそ鬼神をもなごしむくなれいかでさるうかめる古歌の有るべき。

地上　「聞けば愈々いちじるき歌の理ゆふしでの神のしめしか有難や

シテ上　「神かとハうたてはかなきあま少女唯夕風に難波江のあしやよしやも辨へでそよと聞えし恥かしや　地上　「今ハさのみなつゝみぬの深き心のそこひなく聞まくほしや　シテ　「さもあらば　同上　此木の本に下伏して待たせ給ハば夜もすがら月の影も差出ておぼろ乍らも慰めんと梅の蔭に入ると見えて跡も見えず成にけり跡をも見せず成にけり　上歌　ワキ同　待謡　「春の夜の月待ちがての枕さへ〳〵取あへず卷く衣手に移る其香ハかくれなき闇にもしるき木蔭かな闇にも。

梅の木蔭かな

〔役シテ 一聲 下〕「月うつる難波の海の夜の波。心もゆたに面白や。

〔上〕いかに客人此夜らは空もいと好う晴れ渡り月の光も晝なして。花の姿もあらはならん。人になもらし給ひそとよ

〔ワキ 上〕「こはいかに有し女の顔ばせながら錦の衣玉鬘かゝる姿は木の花の精とも今は思ほえず

〔シテ〕「しろしめさねば御理。本より梅の精なれば唯。其折に從ひて定まる姿もあらぬ上舞をかなでゝ慰めんと斯ゝは現れ來りたり

〔ワキ〕「先々かしこし去り乍ら。かたへに人の影もなし。琴笛皷は誰やせん

〔シテ〕「天にます神のおきての風のまに松の小枝は琴をしらめ

〔ワキ〕「汀の芦は

〔シテ〕「笛を吹き

〔ワキ〕「岸うつ浪は

〔シテ〕「覆槽の音

〔同上〕自からなる物の音は神さぶる此浦の昔を返す袖ならめ

〔クリ地〕抑々神代の習はし草を卑み木を尊む其木の中にかばかりの形色香の花なければ梅花を嘉して木の花と云へり

〔※囃子〕〔シテサシ〕※「扨梅の名はさる花の咲きづるのみか麗しき藥の實さへ結びつゝ木の肌妙に木立迄。異木に秀れくはしければ

〔シテ下〕「うまてふ事を通はせて梅の其名を許りたる也

〔※仕舞（神事）〕※其上かんわざの御先に立たす宮人にとらするも本は此ずわえに限る事なりき又御佛の御教にも行ひには必ず梅

のずわえをとれよとぞ天皇の大儀の御場にも主殿の舍人等が梅
のずわえを捧げつゝ紫のきぬがさのかしらに仕へまつれるの御
先を拂ふ由にして、軈て、神代の傳へなり　「初春の七日の豐の明
に舞の臺の飾らひに梅と柳を立らるゝ扨木綿花の古へにもて
はやせしも此花を爲しへに見まほしく思ひて作り初めにけん又
年の端の大嘗に從ふ小忌の人達も昔の髻華の心ばせ木の花の木
を冠の巾子に添立て久堅の天の日蔭のかづらして黑酒白酒の神
酒たうべ千代萬代も限らじと謠ひ舞ふ其袖をうつしていざやか

(毎年)(小齊)　(瓢形)(髮垂)

なでん　地上　※「月もおし照難波の浦　序ノ舞「鶯の聲ものどけき春風に
地上ノル　「梅の匂ひや天に滿らん天に滿らん天に滿らん　「豐けしや難波
の事か大君の惠みに洩れねば草木迄時折々を違へずして花咲き
實を結び　「人民も唯安らかに〳〵明くれば暮るゝ暮るれば
明方の東の山の端匂ひそめて霞みながらに明け行くまに〳〵緑
の空に棚引白雲の天つ少女の天つたくひれ撫づとも撫づとも盡
せぬ巖も我君が代のたとしへにたらじな唯幾久に天地の唯幾久
に天地のむたに榮えまさなんめでたさよ

(共)　(猪領巾)

番外
四番目
略二番

笛の巻　九月

シテ　常磐御前
子方　牛若丸
ワキ　羽田秋長

ワキ詞

「斯様にゐ者ゐ義朝の御内に在し羽田の十郎秋長にてゐ扨も義朝の御子常磐の御腹にゐ三男牛若殿と申て御座ゐを學問の爲に鞍馬の寺へ御登せ御座ゐ處に學問をば し給ゐて夜な〳〵五條の橋に出で數多の人を御斬りゐ上下の煩ひかたぐ以て然る可らずゐ程に常磐の御方に參り此事を御教訓させ申さばやと存ゐ」いかに申しゐ秋長が參りてゐ

シテ詞

「何秋長と申すか此方へ來りゐへ扨唯今ゐ何の爲に來りたるぞ

ワキ

「唯今參る事餘の義に非ず鞍馬の

寺に御座ひ牛若殿夜な〳〵五條の橋に御出であつて數多の人を御斬りひ上下の煩ひかたぐ以て然る可らずひへば此方へ御申あつて御教訓あれかしと存ひ　「扨牛若殿のいづくに渡ひぞ

「あれに御座ひ　「此方へと申ひへ　「畏てひ此方へ御參ひへ

「いかに牛若殿此程の寺にあるかとこそ思しに何とて此方への下りたるぞ　「さんぴ久しく母上を見參らせずひ程に參りてひ

「いや〳〵お事の心を見るに思ふといふも虚言よ今程平家の公達の肩を並べしを爭ひ同じ寺中にあるとても學問にだに勝れなば

他山の聞え寺家の覺えかたぐ母も嬉しう思ふべきに學問をこそせざらめ夜な〳〵五條の橋に出で人を失ふ由を聞くぞとよまこと左樣にあるならば母と思ふな子とも亦　「思ふまじげによしなやなか程に母の思へ共其かひ更になき上のしかりてもよしぞなきうたての者の心やよしやよし親子をも〳〵思ひ思ふぬ中ならば中々に安からぬ御身の爲の然るべしいかなれば畜類又の空飛び翔る鳥も其ことわりを知ればこそ鳩に三枝の禮をなし烏きう〳〵の孝行なるのいかばかりなどや御身の不孝なる

としかれば牛若も手を合せ立寄りて許し給へと泣き居たり
おことまたいとけなかりし時よりも父に離れてむざんやな敵の
手にも渡りなばいかなる淵川の瀬にも沈みもやせましと心にか
けて思ひ寝の夢の一時花の夕べの山颪聲高く泣く時は六波羅の
人やもし聞くらんものを悲しやと忍びて落ちしも今思ひでの涙
かな ロンギ 牛上「母の仰の重ければ明けなば寺へ登るべし去乍ら此笛に
えたる便のあるぞとはいかなる謂ぞ 母上「げに理の不審かな是
は弘法大師とて貴き人の御笛を傳へたる故なれば斯様に我もい

ふぞとよ 牛上「抑や大師の御事は久しき事と聞ものを傳へ給ふは
いかならん 母上「是はもと入唐の商人もてる笛なるに其虫喰のあ
るぞとよ 牛上「扨はしるしの何ぞとも現はし給ふ文字やらん委し
く語りおはしませ 母上「是御覽ぜよ今迄は人にも隠し御身にも
牛「見せさせ給ふ事もなきに 同「今こそ委しく見も明石潟島隠れ
並ぶや蟬のもとに卷き隠したる錦を解きて能く見れば不思議や
な虫喰の一萬五千三百餘歳經て弘法大師の御手に渡り其後に義
朝の末の子牛若が手に渡るべしと確かなる虫喰かたじけなやと

戴き明けなば寺に登るべし。かまえておこと偽りるな。又よと母の
いひすてゝ常のすみかに入りにけり常のすみかに入りにけり

牛若「いかに羽田母の仰の重ければ明けなば寺へ登るべし。今宵ばかり
の名殘なれば五條の橋に出でたち待ちに月を眺めうずるにてあ
るぞ」

牛若「畏つてゆ」

是より外の卷橋辨慶の一聲「扨も牛若の母の仰の重ければ（續くとなり）

番外 四番目 畧二番

シテ 太夫坊覺明　ツレ 池田次郎
ツレ 木曾義仲　ツレ 從兵立衆

木曾五月

シテ「八百萬神も引きます魔の名の弓矢の道こそ久しけれ」ツレ木曾「抑これ
の木曾義仲とは我事なり」ツレ同「扨も平家は越前の燧が城を攻め落
し都合其勢十萬餘騎此蠣波山まで押寄する」木曾「身方は僅五萬餘
騎計略を以て防がんとて」ツレ同「白旗數多とゝのへつゝ黑坂の上に
押立てゝ敵の心を疑はしめ山中にたむろさせ夜に入大手搦手よ
り一度にかゝり俱利伽羅が谷へ敵を落さんと」上歌ツレ同「用意をなして
義仲は木曾勢を七手に別ちつゝその身は殊に精兵一萬餘騎を

砥鹿山は加賀越中の境にあり

黑坂はトナミ山の一名なり

引き從へ埴生に陣をとりにける〳〵

池田詞「いかに申上候。御諚の如く黒坂の上に。多くの白旗を立てゝ候へば。平家の勢是を見て。あはや源氏。大勢向うたるは。取こめられては適ふまじ茲は便宜の所也と。礪波山の山中猿が馬場と申す所に陣をとつて候

木曾「夫こそ義仲が願ふ處なれ。さあらば矢合は明日たるべし構へて身方を戒め戰はずして。夜に入つて押寄せうずるにて候。面々に其由申候へ

池田「畏つて候

木曾「いかに池田の次郎

池田「御前に候

木曾「是より北に當つて夏山の。しげみの中に朱の玉垣ほの見えて。かたそぎ造の社あり。あれをば何處と申すぞ。いかなる神を崇め奉りたるぞ

池田「さん候あれこそ埴生の八幡宮にて渡らせ給ひ候。此所も其御領の地にて候

木曾「義仲何とのう陣とりしに。八幡の御地なるこそ吉兆なれ。いかに覺明

シテ「御前に候

木曾「且は後代の爲一つは當時の祈禱の爲願書を參らせうと思ふはいかに

シテ「御諚の如く御願書を御奉納あつて然るべう候

木曾「さあらば願書を書き候へ

シテ「畏つて候

上カヽル覺明仰をうけたまはり

同上箙の中よりも〳〵小硯料紙取出し墨すり筆を和しけるが思ひ案ずる氣色もなく古書を寫すが如

（上ノ下ノ）（願書ノ）くにてやがて願書を書き終る木曾殿を初めとして其座に在り
し兵ども眞に文武の達者かなと皆覺明をほめにけり（木曾上）「義仲表
指拔き出し　（同）　是を願書に取添へて内陣に納めよと覺明に賜れ
ば覺明是を捧げ持ち御前を立ちてゆゝしくも八幡の宮に參りけ
り　（シテ）「いかに申上ひ御願書並に御表指の鏑八幡の宮に奉
納仕りてひ又此の庄の土民軍の御門出を祝し酒肴を奉りてひ
（氷曾）「斯る目出度き事こそなけれ此度の軍に勝たんずる事必定也さら
ば軍の門出を祝ふべし覺明酌に立ひへ　（シテ）「畏つてひ八幡の宮の

（同）（同）神風に敵の木の葉と散ぬべし　（木曾）「いかに覺明一さし舞ひへ
（シテ）「畏てひ　（地上）「敵の木の葉とちりぬべし（同上）（男舞打上）「酒宴も既に央ばなりし
に不思議や八幡の方よりも山鳩翼を並べつゝ身方の旗手
に飛び翔り納受のしるしを現わしければ木曾殿を初め軍兵ども
皆一同に伏拜み愈々加護をぞ願ひける扨こそ平家の大勢を俱利
加羅が谷に追ひ落し唯一戰に勝利を得しもまことに八幡の神力
なり

願書

ツヨク「何々歸命頂禮八幡大菩薩の日域朝廷の本主累世明君の曩祖たり。
寶祚を守らんがため蒼生を利せんがために三身の金容をあらわ
して三所の權扉をおし開き給へり爰に頻りのとしより以來平相
國といふ者あつて四海をたなごゝろにし萬民を腦亂せしむ是佛
法のあた王法の敵なりそもく曾祖父前の陸奥の守名を宗廟の
氏族に歸附す義仲いやしくも其後胤としてこの大切をおこす事
たとへば嬰兒の蠡を以て巨海を測り蟷螂が斧をとつて龍車に向

「[illegible]」[illegible]

ふ如くなり然れども君のため國のためにこれを起すのみなり伏

して願ゆくば神明納受垂れ給ひ勝ことを究めつゝあたを四方に

退け給へ壽永二年五月日と高らかに讀み上げたり

右願書は木曾の中へ組み入れる筈なれども他の本に習ひて別に致したり、又次の一句は普通演能に聞かざれども他の本に現れたれば爲參考附加する事とせり

「[illegible]」[illegible]

「義仲願書にかぶら矢を神前に捧げ申せば御供の兵ども上矢の鏑

を一つづゝかの寶前に捧げて南無歸命頂禮八幡大菩薩とて皆禮

拜を參らする。

番外四番目略二番シテ調

仲光　季なし

シテ　藤原仲光
ツレ　多田滿仲
ワキ　惠心僧都
子方　美女丸
子方　幸壽

「是ゆ多田の滿仲に仕へ申す藤原の仲光と申す者にてゆ扨も御子

美女御前ゆあたり近き中山寺に上せおかれゆ處に學問をば御心

に入れ給ゆず明け暮れ武勇を御嗜みゆ由聞し召され以ての外の

御憤にて某に罷り上り御供申せとの御事にてゆ程に今日中山寺

へ參り美女御前を御供申し唯今御所へ參りゆ。いかに申上げゆ美

女御前を御供申してゆ　滿仲「いかに美女。久しく寺より呼び下さゝ

る由學問よくせよと也先々御經聽聞せんと紫檀の机に金泥の御

仲光

經。それ〳〵讀誦し給へと美女が前にぞ。さし置きたる　美女ヵ上ヨワク「美女の父御の仰に付きても住むかひもなき淺香山手習ふ事もなかりしかばましてや御經の一字をだに讀まざりければ今更に涙に咽ぶばかり也　滿仲「實にぐ〵滿仲が子なれば。一寺の賞翫隙を得ず。御經讀まぬの理なれ。扨歌の　美女「讀み得ずは　滿仲ツヨク上カ「管絃の問へども云の同上ぬ口なしの　ヨワクこの誰が爲なれば父がさしもに云ひし事に跡をつけぬ庭の雪人に見せんもなにがしが子と云ふ甲斐も無かるべしとて御佩刀を取り給へば走り出るや仲光が中にて兎角御袖に。

和取付きすがり申しつゝ危き美女御前の御身の程ぞ痛のしき　滿仲「如何に仲光。心を靜めて聞きはへ。子供を寺へ登せおくの學問の爲にてこそはへ。あけくれ武勇を嗜まんにの寺におきての甲斐の何事ぞ　「御諚尤もにてはは去り乍ら折々の御折檻にてこそはへ。先々御佩刀を賜のりはへ　滿仲「所詮美女を討つて參りはへ。さなきものならば明神氏の神も御知見あれ。仲光ともに其儘にの置くまじきぞ　「何事も御諚をば背き申まじくは先々御内へ御入はへ」言語道斷以ての外の御怒にてはは御呵りあるべきとの存じはへども。

斯程迄とも存ぜずゆ。いやく何と仰せゆとも一先落し申さばや
と存ゆ。如何に申上ゆ。唯今も餘りの御怒にて某も迷惑仕りてゆ

美女 「如何に仲光。唯今自らを遁しつるも仲光が制するによれり美女を
討つて參らせよと怒り給ふを我れ物越しに聞きし也早自らが首
をとり父御の御目にかけゆへ 「實にく けなげなる事を仰せ
ゆもの哉所詮何と仰せゆとも一先落し申さうずるにてゆや何と
申すぞ又御使のたちたると申すかあら笑止や扨何と仕ゆべき實
にや何事も報ありける浮世かな傳へ聞く阿闍世太子も頻婆娑羅

を害せずや是皆宿縁斯くの如し 美女 「過去にてなせば 「現世に
やがて 上歌同 報も人の科ならじ唯みづからがなす處を愚かにや恨
みある浮世の中と思ふらん互ひに憂き事を語り語れば時移る早
首とれや仲光と言の葉も涙もすゝむこそ悲しかりけれ 「哀れ
それがし御年の程にてゆゆば御命に代りゆゆんずるものを惜か
らぬ命も事に依て心に任せぬ口をしさゆゆ 幸壽 「如何に父上唯今
の御詞こそ幸壽が耳に留りてゆへ早自らが首をとり美女御前と
仰せゆゆて主君の御目にかけられゆへ 「何と申すぞ美女御前

の御命に代らうずると申すかさすが仲光が子にてゆ實にぐ汝が首をとり薄衣に包み夜まぎれに遠々と御目にかくるならばさすが親子の御事なればよも定かにゆ御覽じゆまじさらば御命に代りゆへ時刻移りて叶ふまじと太刀おつとつて仲光ゆ我子の後に立寄れば

美女上「美女ゆ餘りの悲しさに仲光が袂にすがりつゝたとひ幸壽を失ふとも共に自害に及ぶべしと泣き悲しみて制すれば

「のうお主の命に代る事弓矢取る身の習ひなり

「悲しや

幸壽「なたがひに爭ふ命の際

美女「美女も立寄る

幸壽「幸壽も進み

「か

なたゆ主君

美女「こなたゆ思ひ子

「中にてなかく

「仲光が身ゆ是程に惜しからじ何とかせましとやあらんと猛き心にも弱り果たる氣色かな

美女上「親にだに惜まれぬ身を何と唯かく思ふらん中々に情のつらさ如何ならん

幸壽上「情ゆ人の爲ならじ今此際の御命に代り申さずゆ弓矢の家の名ぞ惜しき

同上「彼方此方も幼き御身にだにも理の或ゆお主子ゆをしゝ主君をばいかで手にかけんと心弱しや白眞弓ゆん手にあるゆ我子ぞと思ひ切りつゝ親心の闇打に現なき我子を夢となしにけり我子を夢となしにけり

「實にく汝が申す如く某が心中察しゆへ又美女御前を御供申し。何方へも立退きゆへ」（シテ）「如何に申上ゆ美女御前を討ち奉てゆ」（滿仲）「いしくも仕りたるものかなさこそ最期の未練に在りつらんな」（シテ）「いやさの御座なくゆ某太刀拔き持つて少しためらひゆ處にやあ如何に仲光おくれたるかと是を最期の御詞にてゆ」（滿仲）「如何に仲光おこと存じの如く惣じて美女ならで子といふものなしけふよりしての汝が子の幸壽を一子と定むべし急いで呼び出しゆへ」（シテ）「其御事にてゆ美女御前の御別を悲しみ元結切り暮に失せてゆ同じくの仲光にも御いとま賜のりゆへ様かへばやと思ひゆ」（滿仲下）「心強くの云ひつれ共嘸思ふらん美女丸をも我子の如く手馴しに二人の者に別るゝ思ひ」（同下）「よしや王土に住む習ひ貴命の誰も遁れぬぞと仲光を兎に角にすかし給ふぞよしなき」（同上）「實にや親子の道なればく哀とや又思ひ子の跡とふ法のことのを營み給ふ涙れさよく」（ワキ）「是の比叡山惠心の僧都にてゆ扨もさる仔細ひて唯今多田の滿仲の御所へと急ぎゆ先々此方へ渡りゆへ。如何に案内申ゆ」（仲光）「誰にて渡りゆぞや惠心の僧都の御下向にて

御座ゆよ　「如何に仲光扨も幸壽が事ゆ先某が參りたる由御申しゆへ　「心得申ゆいかに申上ゆ惠心の僧都の御出にてゆ

満仲「あら思寄ずや先此方へと申ゆへ　「畏つてゆ此方へ御入ゆへ

ワキ「心得申ゆ　満仲「扨唯今ゆ何の爲の御出にてゆぞ　ワキ「さんゆ唯今參る事餘の儀に非ず美女御前の御事を申さん爲に參てゆ　満仲「其事にてゆ餘に不思議の者にてゆ程に仲光に申付け失ひてゆ　ワキ「其御事にてゆ先御心を靜めて聞召れゆへ美女御前を失ひ申せとの御使頻りなりしに仲光心に思ふやういかで三世の主君を手にかけ申すべきと思ひ我子の幸壽が首を切り美女と申して御目にかけてゆされば我子に代へて思ふ程の美女御前の御不審免しおゆしませと美女を引き具し満仲の御前にこそ參りけれ　満仲「されば

こそ猶未練なる美女なりけり幸壽を殺さば諸共になどや自害に及ばざる　ワキ「いや〳〵諸事をさし置きて幸壽が佛事と思召し美女を助けてたび給へと涙を流し申しければ　同上　猛き心も弱々とはや領承を申しけり仲光餘りの嬉しさに御盃や菊の酒仙家に入りし身の七世の孫に逢ふ事もたとへならずや親と子の一世の

[illegible] 同上 [illegible]

契りの二度逢ふぞ嬉しき ツヨク 「親子鸚鵡の盃の　幾久しさの酒

[illegible] ワキ 同上 [illegible]

宴かな　「いかに仲光。目出度き折なれば一指御舞ひへ　▲幾久

▲印飛びてしらよろし　[illegible] 同上ルヨワク打上頭二付 [illegible]

しさの酒宴かな。▲楽男舞 「鴛鴦の友なき水に浮き沈み 「下安からぬ

[illegible] シテ上 [illegible] シテ下 [illegible]

思ひこそあれ ノラズ 「あはれやげに我子の幸壽があるならば美女御

[illegible]

前と合舞せさせ。仲光手拍子はやし。唯今の涙を感涙と思はば如何

[illegible] 同上 [illegible]

嬉しかるべき ノル 思ひの涙よそ目の舞の手交るゆ袖の上露も

[illegible]

下露もおくれ先立つ浮世の習ひきのふの嘆きけふの悦びの都に

[illegible]

歸る是迄なりと惠心の僧都の美女を伴ひ歸りければ仲光も遙か

[illegible]

に脇輿に參り此度の御不審人ためにあらずかまひて手習學問ね

[illegible]

んごろにおはしませと御暇申して歸りけるがむざんや幸壽が御

[illegible]

供ならばと暫しお輿を見送り申し暫しお輿を見送り申して。

[illegible]

打ちしをれてぞとゞまりける

番外
四番目
畧二番
シテ詞

高野物狂　春

シテ　高師四郎
ワキ　高野山住僧
子方　春満丸

「是の常陸國の住人平松殿に仕へ申す高師の四郎と申す者にてゆ。扨も頼み奉る平松殿の去年の秋空くならせ給ひてゆ。又春満殿と申して御子息の御座ゆが未だ幼くましますにより某にもりたて申せとの御遺言にてゆ程に片時も離れ申さず春満殿をもりたて申ゆ。又今日の平松殿の御忌日にてゆ間御寺に參らばやと存ゆ

（傳立）

ヨワク　昔在靈山名法華今在西方名阿彌陀婆婆示現觀世音三世利益同一躰實に有難き悲願かな　上歌同　慈眼視衆生悉く〳〵誓ひ普き日の

影の曇りなき世の御恵み後の世かけて頼むなり〳〵

狂言

「春満殿の御文にてゆ御覧ゆへ、「あら思寄らずや先々御文を見うずるにてゆ夫受け難き人身を受け逢ひ難き如來の教法に逢ふ事闇夜の燭渡りの舟待ち得たる心地して我とさめん夢の世に今を捨てずゆ徒らに又三途にも歸らん事嘆きても猶餘りあり此生に此身を浮めずゆいつの時をか頼むべき然るに一子出家すれば七世の父母成佛すといへり此身を捨てゝ無爲に入らば別れし父母の御事のみか生々の親を助けん事是に如かじと思ひきりつゝ家を

出で修行の道に赴く也父母に別れし其後ゆ唯おことをこそひたすらに父とも母とも頼みつれ斯くとも申さで別るゝ事ちぶさの恩の父母に再び別るゝ心地して名殘こそ惜うゆへ搆ひて尋ね給ふなよ三年が中にゆ必ず〳〵身のゆくへをも知らせ申さん墨衣思ひ立どもさすが世を出づる名殘の袖ゆぬれけり

下歌同

書き殘されし言の葉の若木の花をさき立てゝ身のなる果ゆ如何ならん

上歌同

恨めしの御事や〳〵たとひ世を捨て給ふとも三世の契なるものをいづくまでも御共になどや伴ひ給ゆぬぞ今ゆ散りゆく花守

の頼む木蔭も嵐吹く行くへやいづち雲水の跡を慕ひていづくとも知らぬ道にぞ出でにける

次第

「うき世の夢もさめぬべし。

深き御法を頼むなり

「是ゆ高野山の僧にてゆ。又是に御座ゆをさなき人ゆいづくとも知らず來り給ひ出家の御望の由にて愚僧を御頼みゆへ共若し尋ぬる人もやゆらんと様々にいたゆり日を送りゆ。又今日ゆ三鈷の松に伴ひて慰め申さばやと存ゆ

後シテ上一セイ

「薄墨に書く玉章と見ゆる哉霞めるる空に歸る雁の翼につけしゆ蘇武が文夫ゆ古郷の旅衣君を忘れぬ心ぞかし我も主君の御ゆくへ。

上の空なる御跡を尋ねやあふとはるぐの陸奥紙に書き殘す文こそ君の形見なれあら覺束なの御身の行へやな呼子鳥 朝 誘ゆれし花の行へを尋ねつゝ 風狂じたる心かな

「肌身に添ふる此文をふとところ紙と人や見ん

同上

麻裳よし紀の關越えて名に聞きし高野の山深み繁みの木蔭わけ行けば爰も筑波の山やらんと我が方を思ひ出の昔ゆかしき心にも猶我主君戀しやと夕山松の根はふ道をいざや狂ひ登らんいざぐ狂ひ登らん立ち昇る雲路の爰ゆいづく高野山に來て見ればたふとやな或

[illegible]も念佛稱名の聲々或は鳧鐘鈴の聲耳に染み心澄みて物狂の狂ひ[illegible]さむる心や　「いつか扨〳〵尋ぬる人を道のべの便の櫻をり[illegible]あらばなどか主君に逢はざらんと懇ろに祈念して三鈷の松の下に立寄りて休まんいざ立寄て休まん　「是なる物狂をよく〳〵見ひへば古里にて召しつかひし高師の四郎と申す者にてひが某を尋ねて斯樣に物狂となりたると思ひひ　「言語道斷さらば御名のりひへ　「いや暫く思ふ仔細のひへば先知らぬ由にて言葉をかけて御覽ひへ　「心得申ひ不思議やな姿を見れば異形なる

有樣也此高野の内へは適ひひまじ人に咎められぬ先にとう〳〵出でひへ　「是は御利益ともなき仰哉人を尋ねて此山に來るを唯歸れとは情なやかゝる結界清淨の地に入り定まれる高野の山を歸り出でよの御說教心得ずこそひへとよ　「入定れる高野の山とは耳に留る詞也　「實にもく入定と申事は憚り多き詞やらん去乍ら斯く世を遁れ身を捨てゝ山に入るは順義ならずや　「扨はおことは人をば尋ねず我と其身を捨人か　「いや尋ぬる主君も捨人なれば出家の御供申さん爲我も憂き身を捨人也　「さ

やうの出家の望みならば何とて様をばかへざるぞ　「姿を改め
ぬこそ發心初縁の形なれ　「まこと發心初縁ならば人佛不二の
道の知れりや　「事新き仰哉かたじけなくも大師の御身の内心
三昧目前也是ぞ正しく人佛不二　「あら殊勝なりげにも大師の
生あり乍ら生死涅槃に　「入り定れる高野の奥　「今此山にま
のあたり　昔薩埵の因明を授り慈氏の下生を待ち給ふ事人佛不
二の妙躰也　同上　大師の待ち給ふの慈尊三會の曉我の三世の主君
を尋ねて此高野山に參りたり　甲クリ地　抑々此高野山と申すの帝都を

去つて二百里人家を離れて無人聲　「されば末世の隱所として
結界清淨の道場たり中にも此三結の松の大同二年の御歸朝以前
に我法成就圓滿の地のしるしに殘り留れとて三鈷を投げさせ給
ひしに光と共に飛び來り此松の梢に留れる　「抑々諸木の中に
わきて松に留まる其ためし千代萬代の末かけて久しかれとの御
誓願委しく舊記に載せられたり　されば眞如平等の松風
の八葉の峯を靜に吹き渡り法性隨縁の月の影の八つの谷に曇ら
ずして眞に三會の曉を待つ如くなり扨こそ即身成佛の相を現し

入定の地を示しつゝ深々たる奥の院深山鳥の聲澄みて飛花落葉の嵐まで無常観念を勸むる是とても又常住の皆令佛道縁覺のよしをあかすなり　シテ上「然れば時移り事去りて四季折々の自から光陰惜むべし時人を待ざるに貴賤群集の雲霞かゝる高野の山高み谷嶺の風常樂の夢さめ法の稱名妙音の心耳に殘り滿ち〳〵て唱へ行ふ聞法の聲ゆ高野にて靜なる靈地なりけり　同上　尋ねきし

シテ上　又　同下　仏　シテ下　ワカ中舞　他本ニ謡上トアル

「霞の奥の高野山　時しも春の　ノル「花壇場花壇場月傳法院紅葉三寶院よりも猶深々雪ゆ奥の院彼よりも之よりもいつも常磐の三鈷の松陰に立寄る春の風狂じたる物狂物狂あら恐れや　ノラズ「高野の中にてゆ　同　謡ひ狂ゆぬ御制戒を忘れて狂ひたり許させ給へ御聖　シヒジリ　ユルサセ　子　「やあ如何にあれなるゆ高師の四郎にてゆなきか何とて是迄來りたるぞ　シテ「やあれにましますゆ春滿殿にて御座ひか何とて是迄來るとゆあら情なの御言葉やたとひ御身を捨て給ふともいかでか捨てさせ申すべき御心を靜めてきこし召せ平松の御名字を誰かゆつがせ給ふらん先此度ゆお歸りあつて　同上　扨其後ゆ兎も角も御意をばなどか背かんと　御袖にとりつき

カヽル　ヨリ同　上迄謡　ノ本モ　有リ　(三一)

て三世の契朽ちせねば是迄尋ね紀の國や高野の山の陰頼む主君に逢ふぞ嬉しき斯くあるべきにあらざれば高野の山を立出でゝかたり慰め古里に御供申し歸りつゝ共に行末榮えけり是も御法を弘めにし大師の恵なりけりや大師の恵みなりけり

256
348

不許複製

大正元年十二月二十日印刷
大正元年十二月二十五日發行

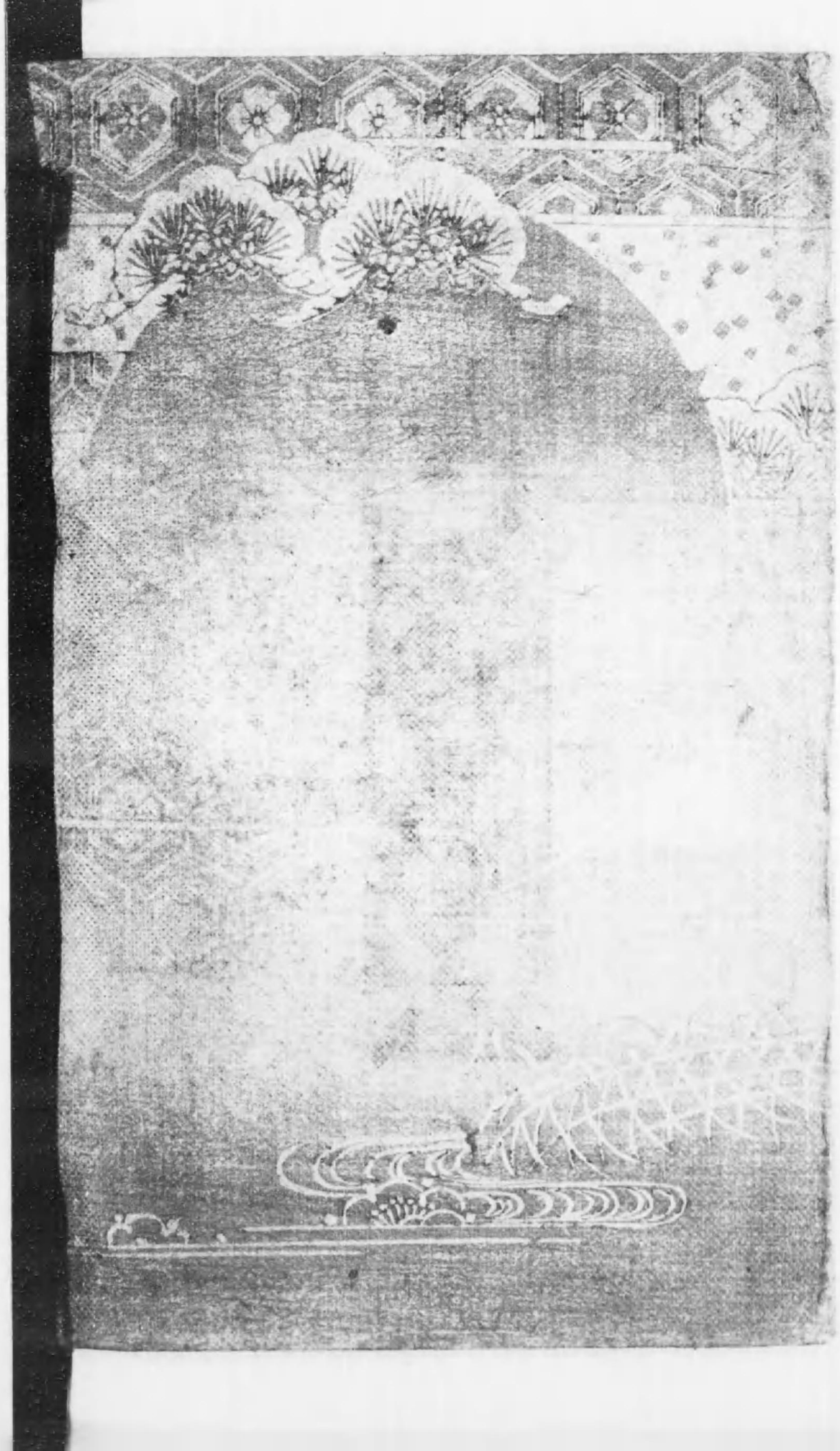
(定價金壹圓六拾錢)
(第四卷奥附)

觀世流謠曲同志研究會編輯

編輯兼發行人　東京市神田區錦町二丁目五番地　渡邊益利

印刷所　東京市日本橋區箱崎町四丁目壹番地　成章堂

發行所　東京市神田區錦町二丁目四番地　高陽堂

振替口座一八八六九

終